

項目	これまでの委員からのご意見等	今後の方向性
全般	<p>① 全体頭数が減少している中、乗用馬が増加している点は特筆すべき事項。一方、減少している農用馬に対する対策も必要。</p> <p>② 農用馬の頭数の減少等、トレンドとしては、現行の増殖目標策定時と変わっていない印象</p> <p>③ (今回の増殖目標での検討が必要かは疑問であるが、) 農用馬の生産基盤が弱体化している現状や課題について明記する必要はないのか。</p>	<ul style="list-style-type: none">● 利用目的毎の需要に即した多様な利活用を推進しつつ、改良増殖目標の公表とあわせてそれら情報のPRを推進。● 関係者が多面的利用等を含めた馬の関連情報を共有できる仕組みづくりについて検討。● 「改良増殖をめぐる情勢と課題」についての記載の中に、生産基盤が弱体化している現状等を盛り込む。

○ 改良目標

項目	これまでの委員からのご意見等	今後の方向性
能力	<p>農用馬(重種馬)</p> <p>① 北海道の生産者はばんえい競馬を目的として生産しており、肥育用は二次的なもの。農用馬の繁殖開始年齢の設定にあたって、肥育馬としての経済性の追求と、ばん馬の生産形態(種付は2歳の能力検査以降に実施)といった両面を満足させうる目標値を設定することは困難。</p> <p>② 繁殖開始年齢2歳の割合を増やすということは、暗に肥育を推進している様な印象となるのではないか。一方で、肥育が農用馬をある程度下支えているのも事実。</p> <p>③ 農用馬の繁殖開始年齢の目標値については、ばん馬の生産実態を踏まえれば、3歳の方が実態を捉えている可能性。</p> <p>④ 2歳種付けの場合は、単房での飼養管理等が必要となることから、留意する点についても付記すべきではないか。</p> <p>⑤ 今回の研究会資料5の課題として明記されていた、「客観的な能力評価手法の確立」及び前回(22年7月)の目標の1の(3)の①に明記されていた「けん引能力の高いもの」といった課題解決手法を具体的に示すべきか、検討が必要ではないか。</p> <p>⑥ けん引能力を見るのに有効なばんえい競馬の将来にわたる安定的な実施のためにも、経済的理由で肉用に転用され頭数確保が困難とならないように、重種馬の高能力候補馬の保留・確保対策が不可欠。</p> <hr/> <p>競走用馬(軽種馬)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 生産頭数が減少傾向で推移しており繁殖馬等を確保しにくい状況となっている中、受胎率、生産率の向上を通じて、生産頭数の確保に努める方向性を盛り込む。 ● 早熟性といった面での家畜の能力については、なお改善の余地があるものと考えられるため、繁殖能力に関する目標数値の設定項目については存置するが、その目標値については、トレンド等を踏まえて再検討。 ● また、「繁殖を開始する際は単房飼等の適切な飼養管理や発育状況に配慮する」等の文言を追記。 ● 具体的な課題解決手法については更なる議論が必要。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ● 国際的に通用する、肉体的かつ精神的に強靱で、スピードと持久力に優れた競走能力の向上について盛り込む。

	乗用馬	<ul style="list-style-type: none"> ● 多面的利用が進展する中、強健性や資質の向上に努めるとともに、多様化したニーズに応じた能力（飛越力、持久力等）の向上について盛り込む。
体型		<ul style="list-style-type: none"> ● 肢蹄が強く、体各部の均称の良いものとし、それぞれの用途や品種の特性に応じた体型を目標とする。

○ 能力向上に資する取組

項目	これまでの委員からのご意見等	今後の方向性
改良手法	<p>農用馬(重種馬)</p> <p>① 生産者が減少する中で、生産基盤維持のためには、人工授精の活用が重要であるが、凍結精液での人工授精は受胎率が低く難しい。また技術者の確保も課題。</p> <p>② 能力評価については、評価モデルが構築されつつあるが、現場でどのように適用するかについて検討が必要。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 家畜改良センターが実施している人工授精の講習会等を通じ、引き続き技術者確保に努めていく。 ● (公社)日本馬事協会において、客観的な能力評価手法の確立に向け、線形評価法の検討が行われており〔平成25年度～〕、その具体的な活用方策についての検討を推進する方向性を盛り込む。
	<p>競走用馬(軽種馬)</p> <p>① 人気種牡馬に種付けが集中する傾向にあり、血統の偏りに対する問題は認識されており、外国産馬を導入するなどの対策が行われているところ。</p> <p>② 頭数は減少傾向にあるものの、現在の競走用馬の生産頭数や飼養頭数は競馬場の数等を勘案すると適正規模なのではないか。</p> <p>③ 新たな血脈の馬(種牡馬、繁殖牝馬)が輸入されており、多様性の確保といった面については問題がないと思われる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 国産馬の能力が国際的に評価される中、血統の多様化に配慮した育種資源の確保・利用に努めるとともに、競走成績、血統情報等を活用した改良を推進していく方向性を盛り込む。

	<p>乗用馬(在来馬)</p> <p>① 乗用馬需要が増大しているため、今後は競走馬からの転用に期待するだけでは、その確保を図れなくなる可能性。乗用馬生産にあたっては、需要者のニーズを的確に把握する必要。</p> <p>② 能力評価については、評価モデルが構築されつつあるが、現場でどのように適用するかについて検討が必要。</p> <p>③ 在来馬は乗用馬利用、初級競技馬やトレッキング、セラピー等に利用できる優れた資質を持っており、そうした馬の資質を生かすための技術を構築する必要。</p> <p>④ 多様な利活用は、保存のため必要である。また、飼養者の高齢化を考えると御崎馬、トカラ馬、与那国馬のように放牧形態で群れを維持し、保存していくことも良い方法だと思う。</p> <p>⑤ 国産の乗用馬の能力発揮による利活用の促進・頭数増に向け、馴致・調教の研修の重要性について記述する必要。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 乗用馬の利用目的が多様化していることから、(公社)日本馬事協会において検討されている客観的能力評価(線形評価)の活用も視野に入れつつ、ニーズに応じた適性に優れた種雄馬及び繁殖雌馬の確保及び乗用馬生産の推進について盛り込む。 ● (公社)日本馬事協会において、客観的な能力評価手法の確立に向け、線形評価法の検討が行われており〔平成25年度～〕、その具体的な活用方策についての検討を推進。 ● 在来馬については希少性に配慮した品種の保存を推進するとともに、その特性を活かした利活用の推進に向け、馴致・調教の重要性について盛り込む。 ● 飼養管理の改善の中で、馴致等の重要性に係る記載を盛り込む。
飼養管理	<p>農用馬(重種馬)</p> <p>◎ 農用馬では高齢化等で種牡馬の飼養も難しくなっている。</p> <p>競走用馬(軽種馬)</p> <p>◎ 大手を中心に技術者育成を行っており、育成技術はかなり進歩している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 農用馬の生産率が下降傾向であることなどから、生産性の向上に向けた飼養管理および繁殖技術の改善を推進していく方向性を盛り込む。

その他	◎ 今後は純粋種の活用についての議論が必要となるのではないかと。農用馬では日本ばん系種、乗用馬であれば日本スポーツホース種といった品種呼称があることから、品種の定義を明確にし、日本固有の品種を確立・改良していくといった対応を考えてはどうか。フランスなどから純粋種を導入し、交配を続けていても、始めに導入したものよりも優良なものは作れない。	● 国内で一般的に呼称されている一部の品種の定義については、明確でない部分も存在しているため、改良を考える上で、まずはその整理が必要。 純粋種の活用については、近交回避の観点から引き続き推進していく方向性を盛り込む。
-----	---	---